

「目を覚ましている」

2015年09月08日

ルカによる福音書 12章 35節～48節。「腰に帯を締め、ともし火をともしいなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はつきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやってくるかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」そこでペトロが、「主よ、このたとえばわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか」と言う。主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。確かに言うておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思ひ、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」

主イエスの再臨による終末、歴史の審判への信仰は初代教会ではリアルであった。この終末信仰は最初のエルサレム教会で財産の共有化をもたらしていたように、燃える信仰を育んだことは確かである。ところが、終末はなかなか来ない。そこで「再臨の遅延」ということが当然、教会の中で問題になった。ルカ福音書は終末信仰を、上記の御言葉のように、主人の帰りを待って、目を覚ましていなさいという言葉で強く訴えている。

現代、主イエスが天の雲に乗り再臨されると信じる人はいない。また、そのように信じる必要もない。私は初めて、旧約聖書の創世記冒頭の「初めに、神は天地を創造された」という御言葉を読んだ時、衝撃を受けた。初めがあるなら終わりがある。時間は初めなく終わりのない無目的、無常流されるのではなく、初めから、目的の終わりへと一直線に進む。その全てを支配する神の存在を説く聖書に驚いた訳である。

歴史の終りと言った場合、核兵器による絶滅、気候変動や公害による絶滅、大きく言えば、宇宙体系のバランスが壊れ地球消滅などが考えられる。聖書が言う終末は、歴史を始めた神が歴史の完成である終わりをもたらすという信仰である。理性的に見れば、愚かな信仰であろう。しかし、私は終末の時を信じている。それは、今の苦悩を思う時、神による歴史の完成である輝かしい終わりを望むことなく、生きることは困難であるからである。終末を望むから、今を耐え、希望に生きることができるのである。

上記の御言葉では、目を覚まして、主人の帰りに備えなさいと言っている。万全の備えなどはしていないが、鞭打たれることはない。輝かしい完成の栄誉に与ることができると、おおらかに信じている。